

令和7年9月30日

農推第1343-6号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意(10月)【ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)、きゅうり:アザミウマ類(ミナミキイロアザミウマ:黄化えそ病)、コナジラミ類(タバココナジラミ:退緑黄化病)】	1~2
病害虫の発生予報(10月)	3
野菜【なす、きゅうり、野菜類(キャベツ等)】	4~7
果樹【みかん、果樹類】	7~9
その他注意すべき病害虫【トマトキバガ、クビアカツヤカミキリ】	9~10

特に発生に注意(10月)①

ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)



ネギアザミウマ成虫

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が拡大して融合し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、アグリメック(アザミウマ類)、リーフガード顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



えそ条斑病の被害葉

次回の情報は10月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

特に発生に注意(10月)②

きゅうり:アザミウマ類(ミナミキイロアザミウマ:黄化えそ病)



ミナミキイロアザミウマ被害葉※

特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマの発生初期は、葉の葉脈沿いにカスリ状の白い斑点を生じる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマがMYSV(メロン黄化えそウイルス)を伝搬し、キュウリ黄化えそ病が発生する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。

防除のポイント

- ◆ 施設の開口部を目合い0.8mm以下の赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ アザミウマ類の発生を認めたら、アフーム乳剤、グレース乳剤等を散布する。
- ◆ 黄化えそ病の発病株はほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



黄化えそ病被害葉※

きゅうり:コナジラミ類(タバココナジラミ:退緑黄化病)

タバコ
コナジラミ※

成虫※

特徴

- ◆ タバココナジラミやオンシツコナジラミが加害する。
- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ 多発すると株全体が弱り、収量も減少する。
- ◆ タバココナジラミがCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)を伝搬し、キュウリ退緑黄化病が発生する。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・融合しながら徐々に黄化する。
- ◆ キュウリ退緑黄化病と黄化えそ病は見た目で見分けることは困難である。

防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mm以下のネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底するとともに、感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ コナジラミ類の発生を認めたら、アフーム乳剤、グレース乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



退緑黄化病被害株※

病害虫の発生予報(10月)

作物名	病害虫名	予想発生量(10月)
なす	うどんこ病	平年並
	アザミウマ類	平年並
ねぎ	ネギアザミウマ(えそ条斑病)	多い
きゅうり	べと病	平年並
	うどんこ病	やや多い
	褐斑病	平年並
	アザミウマ類 (ミナミキイロアザミウマ:黄化えそ病)	多い
	コナジラミ類 (タバココナジラミ:退緑黄化病)	多い
野菜類 (キャベツ等)	シロイチモジヨトウ	やや多い～多い
	ハスモンヨトウ	やや多い
	オオタバコガ	やや多い
	コナガ	やや少ない
	アブラムシ類	少ない
みかん	そうか病	やや多い～多い
	黒点病	平年並
	ミカンハダニ	やや少ない
	ミカンサビダニ	平年並～やや多い
	カイガラムシ類	平年並～やや多い
果樹類	果樹カメムシ類	平年並

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※ねぎは令和5年度より調査開始のため、過去2年のデータを平年値としています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

野菜

なす

うどんこ病



被害葉

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、パルミノ、パンチョTF顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ぽでの発生が多くなる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、水なすで目立つ。

防除のポイント

- ◆ 葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。
- ◆ 開口部を目合い0.8mm以下の赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、モベントフロアブル、アグリメック、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 露地栽培では、天敵昆虫の温存を図るため、ソルゴー囲い込み栽培などを行う。

きゅうり

べと病



被害葉※

特徴

- ◆ 気温20～24℃で発生が多い。
- ◆ 下位葉に葉脈で囲まれた黄色角形の病斑ができ、上位葉へ拡大する。

防除のポイント

- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 施設栽培では換気に注意し、結露を避ける。
- ◆ 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 肥料切れしないように、肥培管理に注意する。
- ◆ 発生を認めたら、プロポーズ顆粒水和剤、アミスター20フロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜

うどんこ病



被害葉＊

特徴

- ◆ 施設栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- ◆ 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。
- ◆ はじめ株の下位葉に小麦粉をかけたような病斑ができる。しだいに上の葉に広がり、葉面全体が白色の粉を振りかけたようになる。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にする。
- ◆ 被害葉を除去し、通風を良くする。
- ◆ 発生を認めたら、アフェットフロアブル、トリフミン水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

褐斑病



被害葉

特徴

- ◆ 高温、多湿の施設栽培で発生が多い。
- ◆ 天井フィルムからの結露水のボタ落ちで発病が助長される。
- ◆ はじめ葉に円形・褐色の小型病斑を生じ、やがて灰褐色の5～10mm程度の不規則な病斑になる。多湿条件では病斑上に黒褐色のカビが生える。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にし、多湿にならないよう注意する。
- ◆ 被害葉・老化葉は早めに除去する。
- ◆ 発生を認めたら、カンタスドライフロアブル、ニマイバー水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜類(キャベツ等)

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ ねぎでは葉身内に食入し、薬剤が届きにくくなるので、卵塊の除去及び集団でいる発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレオフフロアブル(ねぎなど)、グレーシア乳剤(ねぎなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

病害虫発生予察注意報第3号「シロイチモジヨトウ」(令和7年9月2日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2509_r7chuihou03_shiroichimojiyotou_soshin.pdf

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ あぶらな科野菜、なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。また、卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、アニキ乳剤(キャベツ、なす、さといもなど)、ヨーバルフロアブル(キャベツ、なす、さといもなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

病害虫防除情報「チョウ目害虫に注意！」(令和7年7月9日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2507_r7bojo02_choumoku_soshin.pdf

オオタバコガ



幼虫



卵

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 幼虫の捕殺は、被害軽減効果大きい。また、摘除した茎葉や果実に、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し、処分する。
- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバゾンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、ディアナSC(なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

コナガ



幼虫 ※



成虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 発生初期に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、アフーム乳剤(キャベツ、こまつななど)、ディアナSC(キャベツ、非結球あぶらな科葉菜類(こまつな、チンゲンサイ、なばな類を除く)など)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、トランスフォームフロアブル(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこしなど)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

みかん

そうか病



被害果(そうか型病斑)

特徴

- ◆ 降雨時間が長いと発病が多い。
- ◆ 葉、果実の表面に、直径1ミリ前後に隆起する「イボ型」や「そうか型」の病斑ができる。
- ◆ 果実の外観が悪くなり、糖が少なく、酸が多くなるなど品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 被害葉・被害果は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 夏秋梢の病斑は翌年の有力な伝染源となるので、剪定時にできるだけ除去する。
- ◆ チッソ肥料の過用を避ける。
- ◆ 排水、通風を良好にする。

黒点病



被害果

特徴

- ◆ 雨が続くと発生が増加する。
- ◆ 葉、枝、果実に感染して、微小な黒色、円形の病斑ができる。

防除のポイント

- ◆ 伝染源となる枯枝は除去し、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、ストロビードライフフロアブル(かんきつ)等を散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

※注意！

ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 気温が高く、降水量が少ないと発生が多くなる。
- ◆ 葉に体長0.5mmの赤色のダニが寄生して吸汁するため、被害部分は色が抜けて白くなる。
- ◆ 果実に寄生すると着色が遅れ、色がぼけて商品価値が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル(かんきつ)、マイトコーネフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

ミカンサビダニ



被害果

特徴

- ◆ 雨が少ないと発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生の初期に、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤等を散布する。

※注意！

上記薬剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤に対して薬剤抵抗性が生じている地域では、コテツフロアブル(かんきつ)、ダニエモンフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

カイガラムシ類



ナシマルカイガラムシの被害果

特徴

- ◆ ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)等が加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生の多いほ場では、防除を徹底する。
- ◆ 幼虫発生期にモスピラン顆粒水溶剤(かんきつ)、トランスフォームフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

幼虫発生期

ナシマルカイガラムシ: 5月下旬～6月中旬、8月上旬～中旬
ヤノネカイガラムシ: 5月下旬～6月下旬、8月中旬～9月上旬

果樹類

果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。
- ◆ ほ場により飛来量が大きく異なる可能性があるため、ほ場内を見まわり発生及び被害状況を確認する。

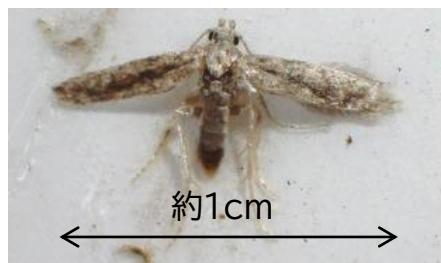
防除のポイント

- ◆ ほ場全体を目合い4mm以下のネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、カメムシ類に適用のあるスタークル/アルバリン顆粒水溶剤（もも、かんきつ、ぶどう、かきなど）、アディオン乳剤（もも、かんきつ、かきなど）等を散布する。
- ◆ 薄暮期から夜間を中心に活動するため、夕方に薬剤散布を行うと効果的である。
- ◆ スギ林やヒノキ林の隣接ほ場では、被害が多くなる傾向があることから特に飛来状況に留意する。

その他 注意すべき病害虫

野菜:トマト・ミニトマト

トマトキバガ



府内で誘殺された成虫

特徴

- ◆ 寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどの主にナス科植物である。成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。
- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレース乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。

「トマトキバガ 生態と防除」(令和6年3月発行)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga_osaka.pdf

果樹：バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫



成虫

特徴

- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で中華麺～うどん状に固まる)を排出する。6～8月に成虫が羽化する。

防除のポイント

- ◆ フラスの発生を見逃さないようにほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)、ベニカカミキリムシエアゾール(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」
もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka_osaka.pdf